

氏名	かな やま やす ひら 金 山 弥 平
学位(専攻分野)	博士(文学)
学位記番号	論文博第489号
学位授与の日付	平成17年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	プラトンにおける感覚と考察 ——『メノン』『パイドン』『テアイテトス』——

(主査)
論文調査委員 教授 内山勝利 助教授 中畑正志 教授 伊藤邦武

論 文 内 容 の 要 旨

論文全体の構想と意図を論じた序章(「はじめに」)につづいて、本論を構成する三つの章は、それぞれにプラトンの哲学発展における節目をなす対話篇『メノン』『パイドン』『テアイテトス』を中心的に取り上げる。各章いずれにおいても、論者は、特定個所について精緻な考察を加えるとともに、それらに共通するテーマとして、プラトンの哲学探求というモチーフを読み取り、そこにおける感覚の肯定的・否定的役割を見極めることに努めている。論文全体の結論としては、感覚の肯定的役割よりはむしろ否定的役割の方が強調される。あるいは、感覚にはせいぜい消極的役割しか認められない。しかしそれは、定義を求める理性的考察を生き抜いたソクラテスの探求精神を、みずからの哲学の根本原則として受け継いだプラトンにとっては当然のことであつたと言えよう。

第1章で扱われる『メノン』は、プラトンの哲学思想の発展を前期・中期・後期の三期に区分した場合、前期の最後に位置し、前期諸対話篇が追い求めてきた個々の徳の定義探求をいわば総括する形で、「徳とは何であるか」という問題を探求した著作である。同時にプラトンは、ピュタゴラス派思想の影響下に、魂の不死、想起説、数学・幾何学から得られた仮設法など、ソクラテス思想とは区別される彼独自の思想、方法論を展開しはじめる。論者は、特に「学習とは想起である」と主張する想起説導入のきっかけとなつた、いわゆるメノンのパラドクス——「人は何であるかを知らないものについては探求することもできない」とする議論——を取り上げ、その内実を調べることによって想起説解釈の一つの見通しを立てること試みている。しかしこの試みに対しては、パラドクスが探求の不可能を主張する議論であるとすれば、真なる思いなしとそれを理性的に反省する能力を認めることでパラドクスは解決され、それゆえ想起説は必要とされないとする解釈がある。またメノンが提出したパラドクスと、ソクラテスによるその言い換えとが同一であるかどうか議論的になっている。論者は、まず、プラトンが確かに想起説をパラドクスの答えとして提出していること(第1節)、当のパラドクスが、探求の手掛かりとして立てられるものが間違っている恐れが伴う以上、探求の手だてではないし、また答えとみなされたものも間違っている恐れがあるから、発見もありえないという仕方、探求の不可能だけでなく発見の不可能をも主張する議論であること(第2節)、またパラドクスのソクラテスによる言い換えがメノンの提出した議論と内容上変わらないことを確認する(第3節)。

このパラドクスは、ソクラテスの提出する「何であるかを知らなければ、どのようなものであるかは知りえない」という定義優先の原則——メノンについても「メノンが何ものであるかを知らなければ、メノンが美しいかどうかを知ることはできない」——を逆手にとって、メノンによって提出されたものである。論者によれば、それゆえ「メノンを知る」ということの内実が、パラドクス理解、ひいては想起説理解のカギになる。すなわち、「メノンを知る」ことが単なる感覚的出会い(見知り)の問題であるとすれば、メノンを知らない人にはメノンを探し求めることも不可能であるように思われるが、しかしソクラテスにとっては、「メノンを知る」とは単なる感覚的経験の問題ではない。それはむしろ、対話による理性的考察を通してメノンの魂の状態を知ることである、とされる(第4節)。したがって、ソクラテスにとってパラドクスの議論は基本的に間違っており、この議論によって探求から逃れようとするメノンは、外見は美しくても、彼の中身は美し

くない。メノンの魂のあり方、すなわち「メノンが何ものであるか」ということが、『メノン』におけるソクラテスとの対話（考察）を通じて明らかにされていくのである（第5節）。

しかし、この間違っ議論に対しても想起説は答えになっていることを、論者は明らかにしている。すなわち、想起説の基本は「探求する方がより優れた者になるから探求しようではないか」という勧めにあるが、より優れた者になる一つの道は、探求を通してみずからの無知を自覚することにほかならない。ところがこの無知の自覚は、奴隷の少年による想起の実験からも明らかのように、想起の過程の重要な一歩だからである。また、想起は、「原因（根拠）の推理によって真なる思いなしを縛りつけて、知識に変えること」とも記されていることからすると、一般の人には発見の確認が不可能であるとしても、少なくとも、知らない場合には自分が知らないということをはっきりと自覚しうソクラテスのような覚醒した探求者にとっては、仮に原因の推理による縛りつけによって知識を獲得した場合には、知識に到達したことを確信しうるはずである、というのが論者の見通しである（第6節）。

第2章で扱われる中期著作『パイドン』においては、徳の定義を求めるソクラテスの探求の目指していた対象が、アイデアとしてははっきりと特定される。またアイデア論との関連において、魂の不死証明、想起説の新たな証明、哲学探求の方法としての仮設法など、『メノン』で登場した諸思想を発展させていく。本章では、これらの主題のうち、「ロゴスのなかでの探求法」および「仮設法」と、「魂不滅の最終証明」に焦点を当てた考察がなされている。論者は、まず、ソクラテスが「ロゴスのなかでの探求法」を導入するに際して、かつて自分は自然学的探求によって魂の視力を損ってしまったと語っていることに着目する。このソクラテスの発言をアイロニーととる解釈の傾向は強いが、しかし、論者によればこれをアイロニーとみなすことはできず、むしろ感覚に頼る自然学的探求が理性原因や善原因などの重要な思想を見失わせてしまうところから、魂の盲目状態に陥らないように、「ロゴスのなかでの探求法」を採用したものとされる（第1節(a)）。また論者は、「ロゴスのなかでの探求法」における「ロゴス」は「命題」として解する。この探求法は、思惟や感覚に捉えられたところを命題化し、理性を最終判定基準として用いることにより、諸々の命題のなかから最も優れたものを選択する方法なのである（第1節(b)）。

次いで「ロゴスのなかでの探求法」の一種である「仮設法」が考察される。論者によれば、そこで採用される仮設は、その都度の探求にとって適切な命題であり、きわめて強力であると判断される命題であれば、どんな命題でも構わないのであり、したがって、それはアイデア論と特別に関係する命題に限られない。ただし仮設は単純命題でなければならないことを、論者は強調する。それゆえ、アイデア存在とアイデア原因の両方をいっしょにまとめて一つの仮設とすることはできず、むしろアイデアの存在を主張する命題と、アイデアを原因と認定する命題のそれぞれが仮設として認定されているのである（第2節(a)(b)）。

そして、仮設法における「協和」「不協和」は、「整合」「不整合」の意味で解されるべきことを確認したうえで、論者は、プラトンが生成消滅の原因を探求する際に、「もしも x が、何かが F である原因であるとするなら (F の反対は $\text{un-}F$)、(1) x は $\text{un-}F$ ではない、(2) x の反対は、何かが F である原因ではない、(3) x は、何かが $\text{un-}F$ である原因ではない」という三つの法則を用いていること、これら三法則も仮設とみなしうることを示して、「仮設法」の構造を立体的に取り出している（第2節(c)）。次いで明らかにされたところによれば、魂不滅の最終証明のためにソクラテスが提出する「より洗練された原因」は、しばしばソクラテスのアイロニーの結果とか、混乱の結果とみなされるが、最終証明のために不可欠なこの原因に対するそうした解釈は受け入れられない。「より洗練された原因」は、「強力な命題」である諸仮設と協和しているがゆえに認められた原因であり、「仮設法」の枠組のなかに位置づけうるものなのである（第2節(d)）。

以上を確認したうえで、論者は、ソクラテスの提出する魂不滅の最終証明が仮設法を用いたものであり、そこにはこの証明ととくに関係する特別の仮設が存在すると考える（第2節(e)）。そして、この証明は不当な議論ではない、と主張する。諸解釈者たちがとくに疑問視する前提「不死なるものは不滅である」は、ソクラテスが友人たちに向かってさらなる吟味を促す仮設の一つとみなすことで、議論構造は破綻を回避できる、と論者は考えるのである（第3節）。

本章の最後で、論者は、ソクラテスの「第二の航海」は、彼が仮設法を考案したのち、同方法を用いて善原因を探求しつづけた考察の過程とみなしうることを明らかにして、ソクラテスの探求の精神を強調している（第4節、第5節）。そこから見直すとき、「不死なるものは不滅である」という最終証明の要となる前提（仮設）は、善原因、理性原因を考慮に入れ

ることによってはじめてその正しさを確信しうる命題であるものとされる。それは、「理性的な諸活動を通して宇宙のうちに善を実現するために、宇宙的な理性と共同するものは不滅であるのが善い」という仕方では確信されるのである。しかしまた、この確信を知識にまで高めるには、善原因のさらなる探求が必要であり、『パイドン』以降のプラトンの哲学活動も、そのような探求の試みとして解しうる、と結論づけている（第5節）。

第3章が扱う『テアイテトス』は、『パルメニデス』におけるアイデア論批判の後を受け、後期著作の最初に位置する対話篇である。『メノン』は、それまでのソクラテスによる諸々の徳の探求を振り返り、「徳とは何か」を問題とする対話篇であったが、『テアイテトス』も同様に、それまでのプラトンによる知識探求を振り返り、「知識とは何か」という問題を取り上げ、そして『メノン』同様、行きづまり（アポリアー）のうちに議論は終わる。第3章はこの『テアイテトス』の第1部、184-186の《感覚＝知識》説の論駁を中心的に取り上げている。《感覚＝知識》説は、知識成立のためには《有る》（ousia）に到達することが必要であるが、感覚は《有る》に到達できないという理由で斥けられる。この議論において問題となるのは、知識であることが否定される「感覚（aisthanesthai）」は、どのような認識であるのか、また感覚が《有る》に到達できないとはいかなることであるのか、という問題である。

第一の問題については、「感覚」の候補として、(1)明示的に下される判断、(2)何かをFとして意識すること（非明示的な判断）、(3)意識される以前の受動的状態、の三つが考えられる。これについて、ある解釈者たちは、「考察（skepsasthai, episkopein）」として記述されている認識活動（185B9-C2, 185E7）を、その考察対象が感覚的性質であるところから「感覚」とみなし、プラトンにとって感覚は考察の要素を含んでいると考える（＝(1)）。また別の解釈者たちは、「感覚が《有る》に到達できない」とは、「コイノン（異なる感覚器官を通して感覚される感覚的諸性質について共通に語りうるもの）の一つである『有る（einai）』を利用できない」という意味であるとして、感覚は、判断のうちに含まれるような命題構造、命題内容をもっていない認識であるとする（＝(3)）。これに対して論者は(2)が選ばれるべきであるとする。すなわち、従来、感覚活動を表わすものとして解されてきた「考察」が、じつは感覚活動ではなく、魂それ自身の考察活動であることを確認（第1節(a)）した上で、『テアイテトス』184-186および関連する他の箇所を調べてみると、プラトンの感覚観は(2)に相当すると考えられるからである（第1節(b)）。

しかし、プラトンは《感覚＝知識》説の論駁においては、たんに(2)の意味での感覚が知識ではありえないと論じているのではない、とも論者は主張する。《感覚＝知識》説はプロタゴラス説の一部であり、それゆえ批判の対象になっているのは、感覚に従った判断が知識であるとする立場である。したがって、感覚は命題構造、命題内容をもちえないことを示しても《感覚＝知識》説の論駁にはならない（第2節(a)）。論者によれば、感覚では捉えることのできない《有る》とは、「…である」に代表される命題構造や命題内容でも、アイデアのような真実在でもなく、世界の有り方・客観的事態である。プラトンは184-186の《感覚＝知識》説論駁において、まず、判断におけるコイノン概念の使用に注意を促すことにより、感覚とは別に、魂による思考・考察活動というものがあることを示す。この考察活動は《有る》（客観的事態）の把握を目指すものである。プラトンは、《有る》の把握のためには魂自身による考察活動が必要であり、感覚はその考察活動を欠いているとして《感覚＝知識》説を斥けるのである（第2節(b)）。

論文審査の結果の要旨

本論文は、プラトン哲学の展開において、クリティカルな位置にある主要な三つの著作に焦点を当てて、彼の認識論上の基本問題を分析し、とりわけ真の意味での知の成立要件を究明することを意図したものである。序章における全体的展望につづき、第1章では初期対話篇を締めくくる位置にある『メノン』を、第2章ではアイデア論が本格的に論じ始められる『パイドン』を、そして第3章ではアイデア論的認識論への基礎固めを意図した『テアイテトス』を扱っている。いずれも長編論考で、それぞれに完結した論旨を展開するとともに、全体としても、知的探求の持続によってこそ、高度な哲学知の可能性が達成されるべきことを通底的な理念として捉え、プラトンの知についての基本的構想を浮かび上がらせている。

『メノン』を中心とした第1章では、まず「知らないものについては、探究することができない」とする、メノンのパラドクスの内実解明に手がかりを求め、ソクラテスの対置する知が、ある意味で正当なそのパラドクスの及ばないところに求められるものであることを主張する。論者によれば、このパラドクスは、探究を単なる感覚的固定の場面だけに表層化すれ

ば、知らないものの「探究」も「発見」も成立しえないことへと導くであろうが、ソクラテスにとっては、知的探求はそれを越えた次元での理性的考察であり、ここでは「無知」の自覚がえって知的探求を促す不可欠の契機となるのである。また、そのための認識論的根拠として想定される「想起説」の意味と役割が、ソクラテス的知の特質と関連づけられる。この議論において、論者は、探究のパラドクスについての諸家の解釈を批判的に検討しつつ、その要点と意図をたねんに解明して、それ自体が一つの成果となっている。さらに、その考察がソクラテスの「探究」の本質を適切に照らし出すものとなっている点も、評価されよう。

ソクラテス的探究についての考察は、『パイドン』においてなされる、哲学の「方法」についての議論とそれにもとづく魂の不死証明を扱った第2章で、さらに深められている。ここでも論者は、ソクラテスによって導入される「ロゴスの中での探究」の意味と構造をテキストに即して精査し、それが「仮設」的に想定された、そのつどの最善の「命題」との整合性によって、探究の過程の適切さを確保するものであり、しかもその「仮設法」を順次積み上げていくことで、十全な知への道を開くものであることを明らかにしている。その結論自体は必ずしも新しいものではないが、論者の粘り強い考察によって、その内実が的確に取り出されている。つづく魂の不死証明の議論は、アイデア論を導入した当の「仮設法」の具体的適用にほかならないが、論者は、それについてアイデアの「存在仮設」とその「原因仮設」とを段階的に読み分け、さらに原因についてソクラテスによって提出された「三法則」をも基礎的な仮設として位置づけることで、アイデア論的不死証明の議論の持つ重層的な仮設法の構造を見いだしている。同時に論者は、「ロゴスの中での探求」および「仮設法」が議論のさらなる継続的深化を要請するものであることをも強調している。魂の不死証明もけっして完結したものではなく、より先なる「仮設」へと開かれたものであり、最終的には「善原因」・「理性原因」にまで考察を及ぼすことによってはじめて確実なものとなるろう、とする論者の指摘は、その点に呼応するとともに、プラトン哲学全体に一つの見通しを与えるものとなっている。

全面的にアイデア論を展開した一連の著作の後で、改めて「知識とはなにか」を問い直した対話篇『テアイテトス』を扱った第3章では、論点をその「第一部」末尾における「感覚＝知識」否定の場面にしぼり、「感覚は〈有る〉に到達できない」というテシスの意味を吟味している。ここでもテキストの分析と諸家の見解に対する批判的検討は精緻をきわめ、とりわけ、プラトンの「感覚」概念を言語的明示化に至る以前の非明示的認知として、その位相を思考と考察のプロセスから明確に峻別・特定している議論は、独自の成果というに足るものである。論者は、さらに、さまざまな感覚器官を通じて感覚される諸性質について共通に語られるもの（コイナ）の存在によって、感覚と思考活動を切り分ける当該個所での議論の意味を解明した上で、感覚は「コイナ」の一つである〈有る〉を欠いているというプラトンの主張は、感覚そのもののうちには客観的事態把握としての「存在」が成立していないことを示している、とする解釈を提示する。それによって、感覚そのものは最終的に事物の存在を把握することができず、そのためには思考と推論の力によって真なる存在のありかを考察することが要請される、というのが「感覚＝知識」否定の論旨となる。これは、論者による新解釈であり、一つの有力な提案として認められるべきものである。

すでに述べたように、本論文は緻密な議論の積み重ねによって解釈と意義を浮かび上がらせることを基本的特質とするが、ときにやや細部の解明とは別のところで重要な問題を残している点もうかがわれる。たとえば、『メノン』を扱った第1章においては、想起説という重要主題についてさらに立ち入った議論が求められようし、第2章の『パイドン』の検討箇所は、論者のように、理性と感覚という対立軸に依拠して解釈しきれぬかどうかは、さらなる検討が必要であろう。とはいえ、本論文において達成された成果は、それ自体として十分に評価されるべきものである。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2005年2月12日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。